

## 〔テーブルクリニック〕

### 1. 乳歯の外傷に対する処置法と予後

○山口 昭一、二木 昌人、中田 稔

(九大・歯・小児歯)

小児歯科臨床の日常外来において、乳歯の外傷を主訴として受診してくる症例は少なくない。乳歯の外傷は、1～2歳の歩き始めの幼児が転倒して発症することが多く、好発部位は上顎前歯部が圧倒的に多い。また、永久歯の外傷に比べ、脱臼や埋入する症例が多いのも乳歯の外傷の特徴である。

乳歯の外傷によって小児が受ける歯科的問題としては、永久歯胚への障害、歯列および咬合の発育に及ぼす影響、歯髄感染による炎症、審美性の障害の他、心理的問題など数多くあげることができる。そのため、外傷を受けた歯に対しては、可及的に保存することが望ましく、後継永久歯が萌出するまで経過を観察することが重要である。

しかし外傷を受けた乳歯の整復固定法については、種々の報告がなされているが、患児の協力状態、乳歯の萌出状態や歯冠形態、更には操作上の問題などから、臨床上その適応に困難を伴うことが多い。そのため、当科においては、レジンスプリントを作製し、ダイレクトボンディングシステムを用いて、固定をおこなっている。この方法の利点としては次のようである。

- (1) 咬合時にも障害を与えない。
- (2) 操作時間が短い。技工操作に占める時間は長い、各ステップの操作時間は短いので、低年齢児にも応用できる。
- (3) 乳歯の萌出状態や歯冠の形態等からの制約を受けにくく、適応範囲が広い。
- (4) 異物感が少ない。
- (5) 審美的に優れている。

そこで、今回我々はダイレクボンディングシステムを用いたレジンスプリントによる外傷を受けた乳歯の固定法の基本的な術式を紹介するとともに、本法を用いて固定を行なった症例の予後についても併せて報告する。